



Title	日本語可能構文の統語語用論的研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	李, 娜
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15118号
Issue Date	2022-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/86466
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Na_Li_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 李 娜

学位論文題名

日本語可能構文の統語語用論的研究

本論文は、日本語において可能表現が実質的に可能な事態や状態の叙述よりも、依頼や許可、申し出などの言語行為として用いられる現象について、統語論・構文論・語用論などの多様な知見に照らして多角的な考察を行った成果である。論考全体は、9章で構成されている。

第一章では序論として、研究目的や方法、論文の構成などを記している。第二章では、言語行為論(speech act theory)の先行研究を概観して、本論で用いる分析概念を整理している。言語行為論では、今でもオースティンとサールの成果だけに注目することが多いが、本論ではそれ以降の言語行為論の発展も検討している。サールの成果を基盤に据えつつも、K.バックやJ.メイの論点も参考にして本論における分析方針を決定している。第三章では、P.グライスによって提唱された推意(implicature)の概念を検証して、可能構文の分析にどのように適用すべきかを確認している。推意の設定については、グライス以降、S.レビンソンやL.ホーン、関連性理論 (Relevance Theory)とでは見解が異なるが、グライスの分類を精密化して分析するものとし、言語行為論との対応関係を明確にするために、R.スタルネイカーなどによる共通基盤(common ground)理論を含む文脈論の枠組みを用いている。

第四章では、ポライトネス理論(Politeness Theory)を概観している。ポライトネス理論は、1980年代から知られているが、近年、インポライトネス(impoliteness)などに拡張していく局面にあり、基準的な理論と見なされる初期の考え方に対してこれを古典的ポライトネス理論と位置づけて批判的に検討する潮流が生じている。本論では、研究手法の変化もたどりながら、新しい知見も含めて整理している。特に、ポライトネスがFTA(Face-Threatening Acts)を緩和するためのストラテジーである点を重視して、D（会話者間の社会的距離）・P（会話者間の力・影響力の評価）・R（共同体における要求性の評価差）を精密に設定し直して分析する「動的な分析」の概念として整備している。

第五章では、日本における可能の形式と意味の分類について細かに論じている。日本語の可能形式は、「行く」に対する「行ける」のような可能動詞形のほかに、レル・ラレルのような助動詞形、「行くことができる」のような複文形式、「行きうる」のような複合動詞などがある。これらに各地の方言を加えるとさらに形式が多くなるため、本論文では現代の標準日本語を対象に記述分類している。文法論で従来から設定されている能力可能と状況可能に加えて評価可能・潜在可能・実現可能を検討対象としており、これに、文の叙述タイプ・意志性・時間的限定性とアスペクトなどの観点を順次加えて分析をしている。意味記述は、能力可能と状況可能を使って分析する手法をとり、文の叙述タイプの影響が大きいと見て後半の分析の方針を定めている。

続く第六章では、可能を表す文について構文類型・格パターン・情報構造の観点から議論をしている。日本語において、可能表現は属性叙述文を形成し、対格を主格に昇格させる構文変化の作用を有しているが、動作主が二格に降格する変化もあり、さらに、属性叙述文はおおむね主題をとるため、格助詞ではない「は」によって主題化標示されるのが無標であることもあって、関わる要因・変数が多くなることを踏まえ、現象を順次整理している。会話での日本語を分析対象とする本論では、主題辞や格助詞が脱落してゼロ化するゼロ助詞も頻用されるため、あわせてゼロ助詞に関する知見も確認した上で、現象全体を把握するための整理を行っている。「太郎が論文を書く」といった他動詞文における主格と対格（ガとヲ）が「太郎に論文が書けるのか」のように、可能構文で与格と主格（ニとガ）に交替することは知られているが、否定文や疑問文、あるいは連体修飾節などの従属節に転じるなど叙述のあり方に強く影響を受け、それらの制約に規則

性があることを他の格パターンも含めてまとめている。情報構造の観点からは、焦点性をもつ格助詞と焦点性を持たない格助詞の用法に分けて、分析を加えている。可能構文は、可能な状態あるいは能力を有する状態の叙述と解されることから、おおむね属性叙述文と共通するが、形容詞述語や形容動詞述語のようにアスペクト形式を後接しないわけではなく、動詞述語文としてアスペクト形式を後接しうる。しかも、かつては正用とされなかった可能動詞のテイル形などが現在では非文とされないなどの社会言語学的な変化もあるため、複合的な要因を踏まえながら論じている。

第七章では、可能構文が実際に用いられるときにどのような語用論的特性を持つかを、文形式ごとにわけて分析している。文形式は、平叙文か疑問文かに分け、それぞれに否定と肯定があるため4つの類型について、どのような発話内力を持つ発話となるかを実例とともに記述し、それぞれが言語行為論からどのように分析されるか、推意をどのように引き出し、また、取り消すかについても考察している。さらに、個々の文における動作主が話者か聴者かそれ以外かによっても、言語行為類型が異なるため、これらの場合ごとに能力可能と状況可能の解釈がどのような用法を持つかを22のケースにわけて記述している。ここから、話者が自分を動作主として可能の否定疑問文を用いる場合、能力可能にはならないこと、同様に動作主が話者でも聴者でもないときには、能力可能と状況可能が意味的に中和して対立解釈を喪失することなどを明らかにしている。章末ではモダリティ論としての論点に言及している。

第八章では、第四章で整理した変数ごとに動的な分析を加えている。3つの変数のうちいずれかが定数として固定されたときに、どのような効果が生じるかという観点から場合分けして議論している。志向性を聞き手と話し手に分けると、前者は従来のポジティブ・ポライトネスに相当するものが主であるが、後者は推意の取消も可能だとする。取消可能な推意を使った発話をすることで、フェイスが圧迫される可能性を排除する、一種のメタ的なストラテジーが成立すると主張している。

第九章では、議論全体を振り返って論点および成果をまとめた上で、今後の課題を記している。